

## 論文

## 憤怒・和解・自由

—許鞍華の映画について—

(下)

京都学園大学 経済学部

川田 耕

## 5・男たちへの怒り

許鞍華は、理不尽な世界全体と憤怒に満ちた自分自身との和解の達成を『客途秋恨』（1990年）によって示したのだが、表現者としての彼女の生涯はそれでハッピー・エンド、本当に「安心立命」というわけではない。彼女はその後、具体的な他者たちと改めて向き合わなければならないことになる。母を通して世界との一定の和解をした許鞍華にとって、具体的な他者とは、誰よりも父であり、男たちである。彼女は、とりわけ、女にたいする男のふるまい — なかでも性と生殖にかかわるそれ — を映画の新しい主題として中心にすえるようになる。それにしても、「望まれない妊娠・出生」を重要なモチーフとしてきた許鞍華にとって男とは何であるのだろうか。

『客途秋恨』の五年後、95年公開の『女人、四十』<sup>1</sup>は、『投奔怒海』ほどではないが許鞍華の映画のなかでもとくに興行成績がよく、おおよそ、深刻な老人問題を軸にしなが家族愛をコメディ・タッチに描いたヒューマン・ドラマとして評価されてきた。この映画は、明らかに有吉佐和子の小説『恍惚の人』（72年）やそれを映画化した同名作品（73年）から、基本的な状況設定や細部のモチーフにいたるまで大きな影響を受けていながら<sup>2</sup>、香港映画の、あるいは香港の文化全体の根強い伝統でもある、人間同士の関係への楽天的な信頼を、とりわけ夫婦間の絆の深さを強調しており、「完全に香港化されている」<sup>3</sup>とさえ評されている。しかし、この映画におけるユーモアのある、家族の愛情の賛美ともみえる部分はこれまでの許鞍華の軌跡からは異色なもので、おそらくは商業的な配慮や他の制作者の意向などがあったものと想像される<sup>4</sup>。許鞍華の軌跡を理解するうえで注目すべきなのはむしろ、男という

<sup>1</sup> 元来は『女人、四十。』と表記されていたが、他の文献に従って、このわずらわしい句点は省略する。

<sup>2</sup> なお、『女人、四十』には、題名の句点も含めて、1985年公開の日本映画『花いちもんめ。』からの部分的な借用もみられる。

<sup>3</sup> 前掲『香港電影新浪潮』74頁。

<sup>4</sup> この頃の許鞍華は、『女人、四十。/SUMMER SNOW』（日本公開時のパンフレット、Bunkamura、1996年）に掲載されたインタビューによると、興行的な失敗が二本続いて撮影の機会にめぐまれていなかったらしい。『女人、四十』は、それゆえ、興行的な成功を狙った部分が大きかったと思われ、その意味では狙い通りになったわけである。なお、『上海假期』（91年）にも家族愛の賛美がみられるが、それが許鞍華の描きたいものではなかったであろうことは、家族間の、とりわけ息子にとっての父を描くことを好む呉念眞の脚本の完成後に映画を撮ることを要求されたという経緯からも推察できる。

生きものの、ほとんど非人間的とさえいえるほど身勝手に愚かなさまが、相当にリアルに描かれていることであり（その点で男全般ではなく「痴呆」後の悲惨を主題とする『恍惚の人』、とくにその映画版とは力点が異なる）、またそうした男たちに耐える女たちの深い苦しみとあきらめの思いが示されていることである。

主人公孫太（孫奥さんの意味）[蕭芳芳]は香港で仕事を続けながら子どもを育ててきた、聡明でしっかりとした女性で、夫と十代終わりくらいの息子とともに香港郊外の大埔という街に暮らしていて、同じビルには夫の両親も住んでいる。七十歳になる舅[喬宏]は日中戦争時に空軍のパイロットとして活躍したことを今でも誇りにして、家長然として身の周りのことは自分ではまったく何もやらず、とりわけ嫁の孫太には横柄で、孫太がほんの少し息抜きするのも見咎めて、靴を履くのもパンの袋を破るのさえも孫太にやらせようとする。しかし、姑が何事も堪え忍んで舅のご機嫌をとり続け、孫太にもやさしく接してくれている。

ある時、舅が、菓子パンを食べながら、もごもごと「妻が寝ていて飯も喰えん、あんな奴いらんから、里に帰すぞ」といった意味の文句を言う。どうしたことかと孫太が見にいくと、姑は倒れている。舅は「すぐに起きるに決まっとる」と取り合わないが、姑はそのまま亡くなってしまふ。こうして、姑に代わって、ただでさえ多忙な孫太が舅の世話をしなければならぬことになる。しかも舅は姑の死をきっかけにして急速に物忘れがひどくなり、嫁の孫太以外の誰のこともわからなくなる。石けんを食べたり、あらぬところで小便をしたり、街中を徘徊したりと、少しも放っておけない状態になり、「老人痴呆症」と診断されるが、軍隊で鍛えた体は元気でそうで簡単には死にそうもなく、若い女をみては好色に笑ったりしている。孫太はそんな舅に一日中振り回され、心身共に消耗していく。

この映画では舅だけではなく、他にも男たちの身勝手な姿が描かれている。この横暴な舅に少しも逆らうことのない夫にも舅の世話を分担してもらおうと孫太は思うが、夫はなんだかんだと言って妻に自分の父親を押しつけようとする。一日が終わって疲れ果てたところに、夫がようやく帰ってきて、何をしていたのかとこぼすと、夫は「友達としゃべってきて悪いか！何をするのでもお前の許可が必要か」などと怒鳴りだす。夫には妹と弟もいるのだが、実父を世話するように強く説得することも、小心ゆえに、できない。あるいはまた、孫太の職場には、見目のいい若い女が入社して、男たちはみなちやほやとして、有能な孫太のことをないがしろにしはじめる。

消耗のひどくなる孫太は舅を、昼間だけ預かってくれるセンターにも連れて行くが、プライドが高く同じ境遇の老人たちを見下す舅はなかなか馴染めず、センターを抜けだして街を徘徊し警察の厄介になって、センターを追い出されてしまう。孫太の息子もそれなりに協力してくれるが、自分の女友達のことなどに気をとられてあまりあてにできない。孫太の消耗はいつそうひどくなり、夫婦はとうとう、嫌がる舅を騙して、老人ホームに置き去りにしてしまう。

こうして孫太は、この身勝手に迷惑極まる舅を棄ててしまうのだが、霞という名の老いた女性の姿を

---

前掲『光影言語』、376頁。なお、吳念真は、『戀戀風塵』（86年）や『非情城市』（89年）をはじめとする侯孝賢の映画の脚本を朱天文とともに担当したこと、また『多桑』（94年）の監督として、あるいは楊徳昌の『一一』（2001年）での俳優としての演技などで、知られているが、後に『八歳、一個人去旅行』（遠流出版、2003年）などの童話でも才能を発揮している。この童話を読んでみても、やはり、生まれ育った家族や郷里へのセンチメンタルな情愛が主題であり、幼児から越境を余儀なくされてきた許鞍華とは大きく資質が異なるのがよくわかる。

みて、心がゆらぐ。霞の夫は車いすの生活で、頼れる人は妻しかいないのだが、何が気に入らないのか、いつも苛立った様子で妻に辛く当たっている。それでも献身的に夫の世話を続ける霞の姿をみて、孫太は舅に仕えていた姑のことを思いだして涙ぐむ。そして、この霞が胃癌になり痛みを耐えながら、夫の行く末を心配して、「ちゃんとお祈りをしていれば阿弥陀仏がお迎えにきてくれますよ。お祈りしなくても私が迎えにきますから大丈夫ですよ……。それにしても、あなたが私を迎えにきてくれると思ってたけど、仕方がないわね」と語りかける様子にうたれる。とうとう孫太は老人ホームに戻り、そこで、すっかり心細げに憔悴し、「家に帰ろう、家に帰ろう」とうわごとのように繰り返す舅の姿をみる。彼を連れ帰る途中、無数の木の白い種が舞い散っているのを見て、舅は「雪だ、雪だ」とはしゃぐ。この南方の地で、しかも夏に雪が降るはずもないのだが、子どものようにはしゃぐ姿をみて、孫太はこの舅を受け入れる決意を新たにし、生きがいであった仕事もとうとう辞めることにする。しかし、ある日、舅の実娘らとともにみなで郊外に遊びにいき、一家で楽しい一時を過ごしているときに、舅は突然倒れて帰らぬ人となる。

このように映画は、孫太が舅を受け入れある種の和解をしていく過程を描く。しかし、それは『客途秋恨』のような母と娘とのそれなりに相互的な和解ではなく、孫太が一方的に努力し、苦しみ、あきらめ、受け入れることによってなされた和解である。映画は、孫太が舅を受け入れた背後には、身勝手な男たちに尽くし続けた姑や霞といった女たちがいることを示している。霞は「私たちが育み失った愛は、私の中ではいつまでも悲しみ、青竹や紅桃が朽ち果てても」<sup>5</sup>といった意味の粵曲（広東地方の伝統的な歌曲）を思いを込めて歌っている。この歌は、おそらくは、広東・香港近辺における排他的で異性愛的な愛情を重んじる伝統、とりわけ女から男への献身的な愛情の伝統があることを暗示するものであろうが、孫太は伝統とも結びついた彼女たちのこうした健気な献身ぶりをみて、自分も何とかもう少しがんばらうと思うにいたったのである。

だが、彼女たちの愛情と献身は報われることはない。男たちは、舅の「すぐに起きるに決まっとる」という台詞に象徴されるように、何をやっても妻は死なないと思いきるほど、女たちに依存しながら基本的な愛情を欠いている。孫太の夫も妻に冗談めかしてこう告げている。「[若いころは]おまえに先立たれたら自殺するなんて言ってたけど、考えを変えたよ。おまえが老いてひどいことになっても死ななかつたら、自分が先に死ぬよ」。自分の父親の面倒を妻に看させながら、自分は妻の面倒を看る覚悟はないのである。

このように、この映画は一見舅との和解や家族同士の愛情と信頼をテーマにしているようにみえて、実はそれ以上に男達の身勝手で醜い姿と、それでも男たちを支える女たちの報われることのない苦しみとあきらめの思いを表現しようとしたものだということがわかる。かつて、この世界全体に憤怒していた許鞍華は、母との和解を経て、女たちの姿をいくらか理想化しながら、怒りの対象を具体的な男たちへとより局所化できるようになり、男たちの身勝手な醜さを、怒りを込めつつ、しかもかなり冷徹に凝視しているのである。

<sup>5</sup> これは「一枕香銷」という古い曲の一節のようなのだが、私には聞き取れず、引用したのは、日本語版の字幕による。『女人、四十。』（DVD、IMAGICA）。

## 6・男たちを追悼する

この『女人、四十』の四年後、英国から中国への香港の「返還」をはさんで、許鞍華は『千言萬語』(99年、英語タイトルは *Ordinary Heroes*) を撮る。この映画は、私の考えでは、許鞍華の最も優れた作品であり、東アジアの映画の歴史のなかでも出色のものだと思われる。この映画においては、彼女の積年のテーマである、世界の理不尽さと望まれない妊娠・出生、そして男達への怒りとが、統合されて表現され、一つの立体的で力強い世界観が提示されることになる。

しかし、その前に、この二つの映画の間に許鞍華が立て続けに撮った三つの作品のうちの一つ、『半生縁』(97年)にふれておこう(他の二つは、男に利用されて棄てられる悲しい女性の姿を描く『阿金』とドキュメンタリー的に自分の過去を回顧する短いフィルム『去日苦多』<sup>6</sup>)。これは『傾城之戀』に続く、張愛玲の同名小説<sup>7</sup>の映画化で、まとまりがよいとはいえない原作に忠実でありながら、細部にいたるまで丁寧に制作された完成度の高い、悲哀に満ちた恋愛劇で、許鞍華が監督として全盛期を迎えていることを実感させる作品である。

上海の工場で働く曼楨[吳倩蓮]と世鈞[黎明]は恋仲になるが、若い二人は互いに遠慮がちで、なかなか関係が深まらないでいる。そうこうするうちに良家の一人息子である世鈞は、父親が倒れて、幼いころからの許嫁のいる故郷南京に帰らざるをえなくなる。一方、曼楨は子どものできない実姉[梅艷芳]に騙されて、姉の夫に犯され妊娠してしまう。姉は、そうなれば、浮気ばかりする夫をつなぎとめられるだろうし、父の死後貧しくなった一家を水商売をして支えてきた自分に比べて幸福そうな妹への嫉妬と恨みもあったので、妹を騙したのである。姉夫婦の家に監禁された曼楨は出産するが、新生児を置いて姉夫婦から逃れることに成功する。しかし、病気で死にかけている姉のたつての願いを受け入れて、三才になる息子のために、その子とその父親と同居することにする。世鈞は、曼楨が自分を棄てて別の男と結婚したと誤解して、かねての許嫁と結婚していたのだが、長い年月が流れてからようやく曼楨と再会し、すべてを知る。二人は涙するが、曼楨はもう一緒にはなれないと告げる。

強姦・監禁・出産という異様なエピソードは、曼楨と世鈞とのナイーブな恋物語と調和させることが難しかったはずである。しかしこの構成上の問題は張愛玲の原作にあることで、許鞍華がそれでもあえてこの小説を選んだのは、いろいろな要因があるのかもしれないが、この小説に『女人、四十』と同様に身勝手に一方的な男たちの欲望に振り回される女の人生が表現されており、とりわけ、あの望まない妊娠・出産のモチーフがあることに惹かれたのだと思われる。また世鈞が、曼楨の姉の夫とは対照的に一見心優しい好青年でありながら、結局は恋人ではなく親の意向に従ってしまう情けない姿も、かなり上手に描かれていることも注目される。許鞍華の男を見る目はやはりたいへん冷徹なのである。

こうした作品を経て、許鞍華は大作『千言萬語』を撮る。冒頭にわざわざ「実際の歴史的事件と人物に基づいている」というキャプションがあることからわかるように、この映画は八十年代前後の香港

<sup>6</sup> 『去日苦多』は1997年の山形国際ドキュメンタリー映画祭に招待されたもので、許鞍華はこの映画祭の審査員を2001年に引き受けている。また、許鞍華の作品はアジアフォーカス福岡国際映画祭の「お馴染み」(アジアフォーカス福岡国際映画祭2008のパンフレットより)で、2008年の福岡アジア文化賞・大賞を受賞している。母親の母国、とりわけ母親の出身地である九州との縁を大切にしているのだと思われる。母親は「シネラ・ニュース」no.143(福岡市総合図書館映像ホール・シネラ、2008)によると、熊本県出身であるという。

<sup>7</sup> 邦訳がある。方蘭訳『半生縁』勉誠出版、2004年。

社会の一断面 — 返還をひかえた緊迫した状況下で民主化運動が高揚し挫折していくプロセス — をドキュメンタリー的にリアルにとらえながら、蘇鳳という名の貧しく無力な女性を主人公にすえ、彼女がこの世界の荒波と男たちの欲望に翻弄され傷つき絶望していく運命を描く。

蘇鳳[李麗珍]は船上で暮らす貧しい少女である。香港には漁業などを生業として船上で暮らす、「艇戸」「水上居民」などとよばれる貧しい水上生活者たちが昔からいて<sup>8</sup>、映画の舞台となる八十年代前後には、陸で暮らせるようになることを、社会運動家たちとともに、植民地政府に訴えていた。蘇鳳は、幼いころ火事によって肉親を失い、祖父と思われる老人と貧しく暮らしていた（この境遇は蘇鳳が、ベトナム三部曲以来、許鞍華が主題としてきた、国家にも誰にも守られず、社会的にも望まれない、寄る辺のない主人公たちの後継者であることを示している）。視点人物である青年阿東[李康生]は、この蘇鳳に財布を盗まれたことをきっかけに知り合う。阿東はいつしか彼女に惹かれ、それとなくそばにいて手助けしようとするが、蘇鳳は彼のことなどさして眼中になく、水上生活者たちを支援する活発な社会運動家の邱明寛[謝君豪]という男を好きになる。聡明で野心家でもある彼は運動家たちの若きリーダーとなり、地区の議員に成り上がっていく。しかし邱明寛にはつきあっている女がいて、蘇鳳は彼の仕事を手伝いながらも自分の恋がかなえられないことを知り辛く耐えている。

一方、阿東は、イタリア出身で香港に布教に来ている甘神父なる人物[黄秋生] — 同名の実在の人物をモデルにしている — に英語を習い親しくなる。この神父は、神父であるとともに、邱明寛らとも協力して水上生活者やホームレスたちのための支援もしている正義漢である。ある日、阿東の母親が、阿東がいつまでも定業につかないなどと甘神父に相談にくる。神父は、息子さんは賢く善良な青年になっているから心配はいらない、と諭す。むしろ心配なのは、アルコールに依存して情緒の不安定な母親の方だと神父は思う。母親は、若いころ助産婦をしていて、しばしば中絶にも関わり — またしても望まれない妊娠のモチーフである — 、その仕事がとても辛かった、自分が煙草に頼るのはそのせいだ、と神父にもらす。別の日、神父は阿東に赤ちゃんを一日預ける。赤ちゃんの母親が大陸出身の不法滞在者であるために当局に拘留されており、艇戸出身の父親には仕事があって、誰も面倒をみられない日があったためである。ところが阿東は赤ちゃんを部屋に放置してしまう。それを知った神父は激昂して、「もう少しで死ぬところだったんだぞ！」と激しく叱責する。うつむいた阿東は「母のことがあって…」といいよどんで、立ち去る。その夜神父は、「人にはそれぞれ困難があるのに、彼をむやみに罵ってしまった。自分の方が彼よりもましだと思いがっていた」と叱責したことを悔やむ。神父はいたらぬ己をむち打つように、政府の庁舎の前に座り込んで、水上生活者たちのためのハンガーストライキを敢行する。そこに阿東がやってきて、母親が自殺したことを告げる。

主人公の蘇鳳も、阿東の母親と似た運命を辿ることになる。邱明寛は結局、かねてつきあっていた女と結婚することになる。そのことを車中で邱明寛から告げられた蘇鳳は衝動的に走行中の車から飛び出して転がり落ちるが、慰められて、結局いつからか邱明寛の愛人におさまって、妊娠してしまう。妊娠

<sup>8</sup> 植民地となる以前から香港を含めた広州とその周辺の沿岸部で生活していた人々の総称で、かつては「蟹家」ともよばれ、その名からもわかるように、陸に住む一般の中国人たちからは差別されていたという。可児弘明『香港の水上居民 — 中国社会史の断面』岩波新書、1970年。『千言萬語』は英国植民地政府に抗議する「香港人」を描くが、「蟹家」の末裔を主役にすえたことは、この映画の射程がいっそう長いことを示す。



を邱明寛には告げずに蘇鳳は墮胎をしに病院に行く。彼女は阿東に付き添ってもらい、手術代も立て替えさせる。帰路、虚ろな目で彼女は阿東に尋ねる、「私のこと好き？」と。阿東はいろいろな思いを飲み込んで、黙って去っていく。彼女が妊娠したことも墮胎したことも知らない邱明寛は彼女にさらに冷酷な事実を告げる。妻に子どもができた、名前も考えてある、と。彼女は無表情に二人の関係を終わらせることを告げ、邱明寛も同意する。しかし、ある夜、蘇鳳はいつそう屈辱的な目にあう。邱明寛の事務所を去ろうと荷物をまとめているところに、邱明寛が帰ってくる。それは89年6月のことで、あの天安門事件が起こって、社会運動家である邱明寛は強い衝撃と深い挫折感に襲われて、事務所でも暴れ回り、この挫折の復讐を果たすかのように、嫌がる蘇鳳を強姦してしまう。蘇鳳はどうとう自殺しようとして道路に飛び出して車に轢かれるが、死にきれずに、記憶を喪失する。自分が誰かもわからなくなった彼女を阿東は受け入れて世話をしてやる。彼女は次第に心身ともに回復して記憶も取り戻していく。

この映画における許鞍華の主張は大胆で明確である。許鞍華は、あの天安門事件という国家による巨大な暴力をあえて取り上げながら — 返還された香港においてメジャーな監督としてはそれだけでも勇気ある行動であろう — 、なおかつ、その暴力にさらされ傷ついた人々を単なる善良な被害者として安易に理想化することなく、むしろ、そのような一見善良で無力にみえる者たちにも理不尽極まる残酷な暴力性があり、それにこそ女たちは傷ついて、命すら失っていくのだ、ということを主張しているのである。映画の最後近くには次のようなエピソードもはさまれている。阿東は施設で知的障害の子どもたちの面倒をみる仕事をはじめたのだが、ある日、市場で働く知人の中年の男が、阿東が面倒をみている少女に性的ないたづらをしていたことが発覚する。阿東は激昂して、男をつかまえ、暴行を加える。男性は必死で許しを請うが、阿東はいつまでも男を殴り続ける — 。正義をふりかざす運動家であれ、市場で下働きをするしがたい庶民であれ、多くの男たちは女と性交はしても、女を愛してもいなければまともな人間として扱ってもせず、一方的な欲望を満たすために利用する、そのようにこの映画は主張している。

かつて許鞍華にとってこの世界全体が恐ろしく理不尽なものとしてあったのが、許鞍華は次第にこの世界を穏やかなものとして受け入れ、『女人、四十』では理不尽なのは男の身勝手な欲望のありようなのだとかかなり具体化され局限されたものになっていた。しかし、この大作『千言萬語』においては、改めて、植民地という大状況や天安門事件によってあからさまに露呈する、自分たちの生きる社会全体の理不尽さを直視し、かつ個々の男たちの暴力がこうした社会の理不尽さと連鎖しながら、女たちを傷つけていくこと示している。そして、その結果として、あの不幸な、望まれない命が宿り、名づけられることさえないまま、葬られてしまうのである。結婚もまた男たちにとってしばしば社会的権力の増大のために手段にすぎないことは、邱明寛の結婚が議員になるためであることが暗示されることによって表現されている<sup>9</sup>。

だが、この映画は、社会的な権力的磁場の周縁（植民地という周縁であり、香港内部における、また中華文明圏における周縁である）にあって苦しむ男たちに傷つけられる女、という二重化された抑圧・

<sup>9</sup> この結婚の権力的な意図も含めた邱明寛と蘇鳳との関係については、黄淑嫻（山本直樹訳）「政治的な男たちの絆と香港女性」（四方田犬彦・斉藤綾子編『男たちの絆、アジア映画 — ホモソーシャルな欲望 — 』平凡社、2004年）も類似した解釈を示している。

搾取といった図式に収まるわけではない。男たちの身勝手さを主題とした『女人、四十』とは異なり、かく男たちの欲望に振り回され不幸になっていく女たちは必ずしも一方的な被害者なのではない。蘇鳳は邱明寛との関係を強制されたわけではなく、むしろ強い男に依存したいという彼女の精神的な必要・必然性があったことを映画は描いている。蘇鳳はしばしば知り合った男を安易に誘惑するし、とりわけ困った時だけ阿東を利用し依存する。男たちと同様に彼女の欲望もまた自己中心的で一方的なものなのである。だから、蘇鳳と邱明寛はいわば相互に利用しあおうとしたのであり、たまたま社会的・身体的・精神的な弱者であり不運な蘇鳳は、そうではない者よりも悲惨な境遇へと転落していくのである。

そして、男たちはたしかに身勝手な欲望で女たちの心身を傷つけていくが、同時にこの映画においては男たちの姿もそれなりに共感をもって描かれており、とりわけ男たちの理想主義的な姿勢は単純に愚劣なものとして切り捨てられているわけではない。甘神父は、罪悪感に苦しむ大陸出身の阿東の母親に『毛沢東語録』を手渡すという頓珍漢なことをしたことに象徴されるように、阿東の母親も蘇鳳のことも理解できず救うこともできなかったが、それでも彼は自分を犠牲にすることを厭わない良心的な人物である。彼はこう述懐する。「自分が結局何も成し遂げられないことはわかっている。苦しんでいる人は自分の力で立ち上がるしかない。それでも、彼らに自分を信じなければいけないこと、そして私が彼らを支持しているという気持ちを伝えることだけはできる。」こうした良心的な理想主義は邱明寛すらも共有している。許鞍華は彼ら男たちをもはや単純に非難したり怒ったりしているのではなく、むしろ、彼らの理想主義も、良心も、愚かさも、無力さも、すべてをありのままに受け入れているように思われる。主筋とは直接には関係なく、この映画には、呉仲賢という政治運動家 — やはり実在した人物 — の人生が、路上での一人芝居によって映し出されている。彼はトロツキストで、情熱的に活動するのだが、仲間割れもあって結局は挫折し、94年に病死する。あるいはそもそもこの映画は、かつて社会運動をしていたホームレスが殺されるという92年に実際に起こった事件に触発されて、彼を主人公にした映画を撮ろうと脚本家に何度も脚本を書き換えさせて長年構想を練ったものだという<sup>10</sup>。こうして実在の人物をモデルに造形されたのが阿東で、彼は最後まで蘇鳳を見捨てずに支え続けようとするのだが—これはかなり願望充足的な造形である—、彼自身は決して幸福にはなれない。

このようにして、許鞍華は、一方では女たちの不幸の原因が男たちの身勝手な欲望にあることを告発しながら、同時に、懸命に生きながらも、この世界と社会の理不尽さや暴力によって挫折し、結局は初志を全うできずに不幸になっていく男たちの姿もかなり共感的にとらえている。許鞍華は、社会も女も男も含めた世界全体における、その誰のせいともいえない理不尽さをみずえているのであり、そこに彼女の深い諦念を感じ取ることができる。

それゆえ、許鞍華にとっての積年のテーマである「望まれない妊娠」とは、男の無責任な身勝手さからだけ生じるのではなく、むしろ、理不尽なこの世界全体のなかでもがき苦しむ男と女の生の営みの、一つの結果として生じる悲劇なのである。だから、望まれない妊娠をし望まれずに生を終えていく生命があったとしても、もはや誰を責めることもできない。残された者にできることは、この理不尽な世界のなかで傷つき死んでいった者に同情し弔う、ということしかない。そして実際、映画のラストシーン

<sup>10</sup> またしても現実の殺人事件をきっかけにした映画であり、それは、「ホーム」を失ったホームレスの死で、これもまた胎児の死を連想させる。

は死者を弔う儀式である。多くの人々がロウソクを灯して天安門事件で倒れた人々を追悼する行事が映し出されるのであるが、映画の文脈としては、それぞれの思いで運動に身を投じながら挫折していった、邱明寛や呉仲賢、あるいは阿東や甘神父ら男たちの人生を弔う儀式であり、さらにいえば、邱明寛との子を授かりながら自ら葬らなければならなかった蘇鳳の痛恨の人生への追悼のようにみえる。

## 7・欲望の自由へ

2001年、許鞍華は『男人四十』を発表する。この映画は小さな人間関係を描くことに終始し、その意味では「小品」であり、許鞍華の映画のなかでは評価は必ずしも高くないが<sup>11</sup>、映画全体は洗練され高い完成度を誇る。スタッフには、『甜蜜蜜』（1996年）の脚本を手がけた岸西や爾冬陞、張之亮など香港映画界を代表する人物が名を連ね、俳優たちも — とりわけ主役の張學友 — よい演技をみせている。香港の映画界全体が興行的に衰退していくなかで同世代の多くの監督たちが映画を撮る機会を失っていくのを後目に、許鞍華はこの前後、『幽霊人間』（2001年）『玉観音』（2003年）など次々と撮っているが、この『男人四十』は許鞍華のキャリアのなかでも円熟のことばにふさわしいものである<sup>12</sup>。

この映画で許鞍華はふたたび、彼女の終生のテーマである、望まれない妊娠と出生のテーマに取り組むが、それは、『千言萬語』以上に繊細に心理的にとらえ直されることになる。妊娠と出産という生命の根幹にかかわる出来事が、そのことに関与した複数の人たちの人生のプロセスと織りあわせられながらドラマ化され、欲望をめぐる、新しい、より自由な — 「自由」がこの映画の一つのテーマになっている — 人生への展望が示される。

映画の主役は、題名の通り四十才ほどの男で、林耀國 [張學友] という。林耀國は英語で教育を行う「中学校」（この映画に出てくる生徒たちは日本でいう高校生の年齢）の先生で、国文を教えている。あまり勉強熱心ではない生徒たちにそれなりに懸命に教えていて、いい先生のようにはあるが、よくある平凡な中年の男のようにみえる。彼の家庭も平凡そうで、専業主婦の妻 [梅艷芳] と、大学卒業をひかえた長男と大学入試をひかえた次男の四人で暮らしている。

ある夜、家で生徒たちの作文を添削している。作文のテーマは「重陽節の偶感」で、いつものように退屈なものばかりだったが、ふと、才気を感じさせる文章に出会う。

重陽節とは何だろうか。登高、鮮花、香燭、墳墓。重陽とは死んだ者の日だ。安らかに眠る白骨が泥の下で伸びをしている。ああ、私の清らかな夢を乱すのは誰なのだ？

偶感とは何だろうか。断片、印象、見聞、随想。偶感とは死んだ者の言葉だ。呼吸が止まり脈も絶

<sup>11</sup> 例えば、香港電影評論学会が『2001 香港電影回顧』（香港電影評論学会、2003年）で『男人四十』を多角的に論じているが、結局評価は定まらず、この学会はこの年の「最佳導演」（最優秀監督）として許鞍華を選びながら、それは『幽霊人間』の監督としてであった。

<sup>12</sup> とはいえ、本稿では論じる余裕がないが、『玉観音』もまた看過すべき作品ではない。表向きは、人気俳優二人を主演にすえたサスペンスとアクションの娯楽映画でありながら、それまで許鞍華が取り上げてきた人間相互の愛情と憎しみの複雑なドラマを巧みに統合し織り込んだ、やはり完成度の高い映画である。『幽霊人間』もよくできたホラー映画で、興行的にもよかったらしい。この時期の許鞍華はまったく異なるジャンルの映画を次々と撮っていて、しかも失敗作といえるものは一つもない。



え、言葉の海の無縁墓地で干からびている。今日はちょうど重陽節だ。ああ、大変だ、干からびた亡骸が蘇った……

それは胡彩藍という名の美しい女の生徒〔林嘉欣〕が書いたもので、林耀國はそんな彼女が巧みな、しかも彼の出したテーマ自体を否定する、さらにいえば彼の人生そのものを揶揄しているのかもしれない挑発的な文章を書いていることに、胸がざわめくを感じる。彼女は実は以前から林耀國のことが好きで、あえて挑発的な作文を書いたのだ。以後、胡彩藍は大人びた方法で林耀國を幾たびも誘惑する。家族を大切にし、よい先生でいようと努力している林耀國は当惑し、誘惑を止めるように言う。それでも胡彩藍は、「私の自由を尊重してほしい。私が誰のことを想おうと、それは私の勝手よ」、「先生は私ではなく自分のことを心配して」と訴える。いくらか謎めいた台詞だが、その夜、林耀國は妻の申し出を聞いて、胡彩藍のことばを思い出す。

妻陳文靖は林耀國に次のような意味のことを告げる。「彼が病気で死にかけているから、助けたい、休暇をください」と。彼とは、二人が高校生だった時、国文の先生であった盛という名の男である。林は動揺しながら、胡彩藍の言うように、妻の「自由」を尊重せざるをえないと思い、妻が盛先生を看取することを認める。そして、自分と妻と盛先生の間を思い起こす。

高校生だった林耀國にとって二人はともに大切な人で、林少年はクラスメートであった陳文靖に恋をしていて、自分の文才を見込んでいろいろと教え導いてくれる盛先生を尊敬し慕っていた。ところがいつの間にか陳文靖と先生はつきあいだして、彼女は妊娠してしまう。彼女はそのことを先生に知らせようと思うが、先生の妻も妊娠していて、妻とともに妻の郷里の台湾に転居することにすると先生に告げられる。棄てられたことを知り、陳文靖は墮胎しようと思うが、不安になって自分に気のある林耀國に病院についてきてもらう<sup>13</sup>。しかし、成人した家族の許可がないことを理由に病院は墮胎手術を拒否し、結局彼女は出産する。この時の二人の思いはあまり描かれていないが、林耀國は彼女とその息子を受け入れ、新しい家庭が始まる。その後、二人の間には男の子が生まれ、異なる父をもつ二人の息子にはこの過去は告げずに、今日まで平凡な家庭のふりをして暮らしてきたのである。

陳文靖は盛先生とのことはもう終わったことだと思おうとしてきた。林耀國を夫として、「模範的な妻」を二十数年演じてきたのである。しかし彼女の心のなかでは、盛先生と結婚したかったという思いと、彼に妊娠させられて棄てられたことへの激しい怒りとが、自覚できないほど激しくぶつかりあいながら今日まで渦巻いてきたのだ。しかし、老いて死にゆく先生をみて「それらの気持ちはすべて消え去って、ただかわいそうだと思った」。だから、彼女は腎臓の病気に苦しむ先生を看取りたいと思ったのだった<sup>14</sup>。

妻がかつての男のもとに通うようになったことに当惑しながら、林耀國はためらいなくまっすぐに生きているようにみえる胡彩藍に心惹かれていく。林耀國はこれまで懸命に誠実に生きようとしてきた。

<sup>13</sup> 「望まれない妊娠」のモチーフのなかでも、不倫をして妊娠をし、不倫相手の妻も同じ時期に妊娠し、妻の方は出産し、自分は墮胎を選ぶ、というパターンは、『今夜星光燦爛』（1988年）、『千言萬語』に続いて、これで実に三回目であり、次第にその内実がはっきりと表現されるようになっていく。

<sup>14</sup> こちらは、アルコール依存症のための病気で死に行く、かつての先生であり愛人でもあった男を見送る『今夜星光燦爛』の、より丁寧な再演でもある。

「いい学生をするのが終わったら、いい父親になろうと思った。そしていい夫、いい先生に」なろうとしてきたのだが、妻は実はずっとかつての男のことが好きだったのである。林耀國は途方にくれながら、胡彩藍にたいして自制をしている自分が馬鹿らしく思えてくる。胡彩藍はそんな彼をみすかすように、彼のこれまでの人生を何度も嘲笑する。彼女が繰り返すメッセージは、過去や家族や立場に縛られて生きることは、本人は誠実だと思っているだろうが、それは、彼女が作文でも言っているように、干からびた死へと至る道であり、もっと自由に自分の欲望を生きればいい、ということである。図書館で、彼の寄贈した、盛先生の書いた本が誰にも借りられず虫が喰っているのをみせて、彼女は「他の男たちは愛人を囲ってるのに、先生は本の虫を飼ってるの？」という意味のことを言う。それでも思いあぐねる彼に、近代人を批判するニーチェのような口振りで、さらにこう言う。「子どものころ、反省しろ反省しろって誰かにいわれすぎたんじゃない？私は反省なんかしない」。様々な思いが交錯するなか、彼は知人が新しく開いた深圳のバーで胡彩藍と遊び、とうとう彼女と関係をもってしまう。朝帰りの電車のなかで、思案顔の林耀國に胡彩藍はこうたずねる。「奥さんへの言い訳を考えているの、それとも自分への言い訳？ どうしてそんなに言い訳ばかりしているの？」

この映画でとりわけ注目されるのは、林耀國が不倫をする男でありながら、思慮深い誠実な男として描かれている、ということである（そもそも、許鞍華がこれほど男の内面に立ち入って表現したのは初めてである）。この林耀國と胡彩藍の関係は、かつての盛先生と陳文靖との関係の、かなり正確な反復になっており、盛先生と陳文靖の関係は、最初の作品『瘋劫』以来飽くことなく繰り返されている、不本意な妊娠をして破綻するカップルの再演である。林耀國の姿を通して、この映画では、不倫をし女を妊娠させる男の姿が — 胡彩藍は妊娠しなかったようだが — 、許鞍華にあって初めて同情的で立体的に表現されている。彼は、退屈な男だと胡彩藍に繰り返しなじられるものの、それでも彼は、家族や生徒たちや自分自身への繊細な感受性と寛容な思慮に富んでおり、だからこそ他者との関係のなかで変わっていくことができる男である。この映画は、二年前にアカデミー賞作品賞を受賞したハリウッド映画『アメリカン・ビューティー』（1999年）に想をえている部分もあるのかもしれないが — 倦怠期を迎えた四十才前後の夫婦がそれぞれに他の異性に惹かれて失敗する話である — 、主人公の人格造形ははるかに繊細で、誠実さが強調されている。

同時に、望まれない妊娠をした女も単なる被害者ではないことが『千言萬語』よりいっそう明確に示される。胡彩藍が実は「劇中作家」 — 今映し出されている劇のなかで将来その劇を作るであろうと措定されている人物 — という特権的な位置にある、つまり多分に許鞍華の分身であることは、彼女が劇中で二度にわたって林耀國の物語を将来つくるかもしれないと言っていることに示されている。そしてこの胡彩藍=新しい許鞍華は、もはや自分が被害者などとは決して思わないし、自分が林耀國に惹かれたのは父親の愛情に飢えているからではない、などとそれなりに自己分析することもできる。そして、胡彩藍の前身である陳文靖も次のように述懐する。「全部の責任を彼に押しつけて、自分は無辜で、被害者なのだと思って、彼を恨み抜いた」。この言い方からもわかるように、老いた盛先生と再会した彼女はもはや一方的な被害者意識にとらわれてはいない。これまでの、盛先生への自分の感情については、「解決していなかった問題がたくさんある」と自覚し、だからこそ、解決すべく彼を看取ることにしたのである。

許鞍華はこれまで女を妊娠させた男を暗に、あるいははっきりと、身勝手に無責任だと責め続けてきたが、この映画ではこのように、被害者意識を超えて、男女の相互の感情を繊細に描き出し、そこに憎しみだけではなく、より深い場所に流れる愛情もはじめてみいだしたのだ。陳文靖が結局盛先生を愛してきたことに、だからこそ憎んでもきたことに、陳文靖自身も林耀國も気がつき、それゆえ、二人はこれまでの虚偽の生活を終わらせ、別れることになる。それが胡彩藍のいう「自由」、つまり混乱を解きほぐし自らの欲望に多少なりとも気がつき、その欲望を生きていく、ということなのだと思う。むしろ、陳文靖も胡彩藍も、なぜ自分が年上の男に惹かれるのか、なお十分に理解しているようには描かれてはいないが、それでもそこに憎しみや恨みにとどまることのない欲望があることを許鞍華はようやく自覚し認めるにいたったのである。

こうして夫婦がそれぞれの深い欲望に気がつき、虚偽のうえに成り立っていた家庭生活を終わらせ、異なる道を歩み出そうとする時、夫婦はようやく長男にこれまで告げなかった事実を告白する。おまえの本当のお父さんは違う人で、その人は今死にかけているのだよ、と。すでに賢明な若者に育っている長男がこの事実と長年の虚偽をどう受けとめたのか、映画はあまり描かない。しかし、林耀國は生徒に出した「私の初めてのこと」という作文のテーマにこと寄せて、愛情のこもった手紙をこの「息子」に書き送る。

私が初めて国文を心から好きになったのは、盛という名の先生ゆえだった。初めて恋をしたのは、クラスメートの陳文靖という名の女の子にだった。彼女は私の前に座っていて、授業になると、彼女の髪からベビーパウダーの香りがした。私が初めて自分が重要な存在だと思ったのは、おまえが生まれたあの日だった。ベッドに横になっていたおまえは、顔中しわだらけで、子猫のようなかわい声で泣いていた。おまえを抱いて、どうしたらいいのかわからなかったけど、それまで感じたことのない不思議な感覚が湧き上がってきた。世界は柔らかになり、私も重要な存在になった。あつという間に子猫は子猫でなくなり、すぐに自分の「初めてのこと」を探しにでかけた。ほんのささやかな片隅にも、まったく新しい「初めてのこと」が彼を待っているのだろう。

この手紙は、血はつながっていないけれども林耀國が長男を彼なりに愛してきたことを伝えているが、それだけではなく、胡彩藍の作文とも響きあいながら、映画のテーマ全体を表現している。つまり、死へとむかう干からびた生活ではなく、常に「初めてのこと」へと向かい、新しい生を育み続ける、生き生きとした欲望を生きなければならないこと、林耀國にとってそれが一つには、陳文靖と盛先生の子どもを育てることだったのであり、さらにその子が、新しい世界へと進んでいこうとする欲望を尊重することが、林耀國の愛情のこもった欲望でもあるのだ、ということである。

父と息子の絆を再確認した二人は、陳文靖が世話をしている盛先生を見舞いに行く。先生はすでに昏睡状態だったが、林は盛先生にこう語りかける。「先生がくれた本と二本の万年筆は棄てたり人にあげたりしました。でも、先生が覚えさせてくれた本は今でも覚えています」。そう言って、林耀國は妻子とともに蘇東坡の「赤壁賦」を詠う。先生がくれた愛情は、本やペンといった干からび死んだものではなく、生き生きとした言葉として林耀國の中に生きていくということであり、残される三人をつないで

もいるということでもある。そして、この一連の成り行きは、やや間接的な形ではあるが、陳文靖にとっては先生との、そして許鞍華にとっては許し難かった男との、それなりの和解を表現しているのだと思われる。

むろん、ここでも和解は十分満足できる相互的なもの、というわけではない。陳文靖の盛先生への愛は報われず、林耀國の妻への献身も、胡彩藍の林耀國への想いも、すべて報われない。考えてみれば、許鞍華はずっと、こうした報われない愛情、とりわけ女から年上の男への報われることのない愛情を描いてきた。『今夜星光燦爛』や『千言萬語』だけではない。『客途秋恨』では、幼い曉恩と祖父とのいくらかセクシュアルにもみえる結びつきが悲哀をもって回想され、『女人、四十』も舅の妻代わりになる話とも受けとめられる。いずれにおいても、彼女たちが想うほどには、年上の男たちは、彼女たちを大切にはしてくれなかったし、彼女たちの成長を見届け、受け入れたり謝罪をしたりする、ということもない。

こうした相互性を欠いた欲望は元来、『千言萬語』の邱明寛などが示すように、しばしば身勝手に攻撃的なものであるし、それは充足されず報われないままだと、蘇鳳や陳文靖が示すように、被害者意識や憎しみや、さらには絶望といった何か別のものに変質してしまう。だからこそ、相互性のない欲望を充足しようとするのはあきらめ断念されねばならず、そうすることによってはじめて、人は新しい欲望を生きることができる — それが許鞍華の描いてきた不幸な女たちの後継者であり総決算である胡彩藍が示していることだと思われる。彼女は学校を中退し、長い間、林耀國と会わないようにした。結局は彼が自分ではなく妻子を愛していることを知って断念したのである。そして、卒業式の日林耀國の前に現れ、かつて授業時間に林先生の似顔絵をたくさん書き込んだ国文の教科書を林耀國に渡し、将来の夢を語り、去っていく。胡彩藍は年上の男への思いを断念し、自分を自由にして、新しい欲望を生きることを選んだのである。

## 8・おわりに

こうして許鞍華は、世界が解体しかねないような恐怖と憤怒に満たされた病的状態をなんとか生き延び、母親との和解を経て、望まれない妊娠という不幸な出来事とも向き合い、かつて憎んでいた男たちを次第に理解し許せるようになり、自分自身への内省もへて、ようやくこの世界とおりあい、自分の欲望に忠実な、新たな生を行き直そうとするところにまで到達したのである。しかし、そうしようと思った時、すでに自分が年老いていることを知るのは悲しいことであろう。林耀國も陳文靖もどこまで人生をやり直せるだろうか。『男人四十』のラストはこうした悲哀を示している。林耀國は別れる前に一緒に長江に行こうと妻を誘う。今の機会を逃したら、李白や蘇東坡の愛でた長江の風景は、三峡ダム建設のために跡形もなくなってしまうだろう、と。「多くのことは失われるんだ」と林耀國が言って、緑豊かな長江の映像で映画は終わる。若いころ、情熱を燃やして、挫折して、それでもがんばって、そして辿りついたのが、観光旅行であったとは、人生とは何とささやかなものだろうか。

人生への失望 — しかしそれは、若いころの世界への憤怒をこめた絶望とは異なる。「上」でふれたように、かつて許鞍華にとって「水」は孤独と死の恐ろしい深淵であったが、満々と流れる水と岸辺の豊かな緑に満ちた長江は、観光地にすぎないとはいえ、生命力のあるトポスになっている。

2006年に公開された『姨媽的後現代生活』（邦題『おばちゃんのポストモダン生活』）もこのような、絶望とは異なる、ある種の生命力を感じさせる「失望」を描くことよって、さらに新しい展望を表明している。

結婚し娘もいるにもかかわらず、都会での華やかな生活を夢見て貧しい家族を棄てた姨媽（母の姉妹を意味する）[斯琴高娃]は、それなりに都会での生活を楽しんだようではあるが、老いて結局、上海の狭いアパートで一人寂しく暮らしている。魅力的な初老の男潘如常[周潤發]が現れて心躍るが、彼は詐欺師まがいのくだらない男で、彼のせいでこつこつためてきた老後の資金をすっかり失ってしまう。結局、彼女は怪我をし入院して、迎えに来た娘[趙薇]に引き取られて、もとの田舎 — 許鞍華の生まれた鞍山ということになっている — に帰ることになる。そして、一度は棄てたはずの夫と、もはや何の感慨もないかのように無表情のまま、老後を過ごすことになる。この老夫婦はもはや長江観光を夢見ることすらできず、自分たちの人生にすっかり失望しあきらめているようにみえる。映画には、他にも不幸な女たちが次々と登場する。顔に大きな傷痕のある若い女、認知症の老婆、愛猫を失って倒れる隣の初老の婦人、あるいは、貧乏ゆえに病気の子どもを安楽死させる母親・・・最後のエピソードは墮胎のテーマの変奏とみなせるだろう。

しかし、この映画は女たちの人生への絶望ばかりを表現しているわけではなく、むしろ全編にわたって、悲哀とともに、不思議なほど明るいユーモアに包まれている。題名がそのユーモアを象徴しているが、孤独だった主人公が老いて浮かれて恋をする様子も、かつて棄てた娘に罵倒されながら結局引き取られる様子も、映画はユーモアをもってやさしく肯定しているようにみえる。とりわけ注目されるのが、この映画では、男にたいする怒りがまったく表現されておらず、むしろ、男たちのふがいなさをユーモアをもって受け入れているようにみえることだ。いつも軽薄そうな表情をしている潘如常は彼なりに姨媽にやさしく、決して悪人であるようには見えない。他の男たちもまた、おしなべて無能で無力だが、積極的な加害者などではなく、哀れな庶民にすぎない者たちとして描かれている。

そして、この映画は主人公が老いてすっかり希望を失いながらも、最後には一つの希望の可能性を示す。彼女を引き取りにきた娘は、かつて自分を棄てた母親に今でも怒り狂っており、老いた両親を背負った彼女にはしがらない仕事とふがいないう男友達しかなく、彼女は前途を悲観して目をこらし、煙草を深く吸い込み、いかにもこの世界に絶望し不幸そうである。けれども、この映画が意義深いのは、そんな彼女を遠くから優しく見守っているということである。本人は自分は不運で不幸だと思っているかもしれないが、そうやって怒り悩んでいることが生き生きと生きるということなのだ、と許鞍華は語っているように思われる。思春期を迎えた従弟の恋の悩みをきいてやる彼女の姿は、この世界の理不尽さを知り尽くしながら、なお怒り、なお希望を棄てないでいる賢人のおもむきすらある。私は老いたが、しかし、私には若く賢明な娘がおり、恋する甥がいる — それが『姨媽的後現代生活』の、そして晩年の許鞍華の — 実人生において許鞍華はずっと独身で子どもはいないようだが — おそらくは唯一の希望なのであろう。それは一見平凡にみえるが、ひどく不幸な人生をкаろうじて生き延びた人にとって、世界と自分の存在を許し肯定できた、一つの報いなのであり、それが意外にも明るく穏やかな希望であることは、この映画のユーモアが示しているように思われる。かつて許鞍華は、恐怖と暴力に満ちた迫害的世界を表現してきたのだが、そのような不安定で危険な時代を生き延び、三十年の時を



経て、ここまで穏やかな人生観に着地できたということは、やはりたいへんな力業である。

もちろん、結局は、先行する世代にとっても、後の世代にとって、人生は同じように理不尽で苦しみの繰り返しである。初期の許鞍華のいうように、個々の人間の望みとはまったく無関係に国家の力が個人に襲いかかっているかもしれないし、男たちは社会的権力を背景にして女たちの心身を傷つけるかもしれない。そして何より、誰にも望まれることなく始まり終わる人生もあるかもしれない。最後にはそのような不幸な運命を甘受し、悲しく辛い人生の末路を生きなければならない。それが生き残るということであり、死んでいくということである。けれども、この世界を生き抜き、この世界と自分自身の人生に和解することができた者は、たとえ残された時間がわずかで自分の人生に失望していても、後の世代の人が生き生きとした欲望に導かれて新しい何かを生みだしていくであろうことに、共感と希望とユーモアをわずかではあれ、もつことができる。それが晩年の許鞍華の辿りついた境地であると思われる<sup>15</sup>。

付記・なお、本論文の「上」を発表した段階では未見であった許鞍華の最初の映画『瘋劫』を観る機会があった（福岡市総合図書館に『シークレット』というタイトルでフィルムが所蔵されている）。プロットは「上」に記したものと細部で微妙に異なる部分があった。改めてストーリーを記す。

香港の古い下町の近くの森の中で木にぶら下げられた若い男女の惨殺死体が発見される。女の顔はつぶされているが、二つの死体は、行方不明になっていた医者の方士卓とその女友達の李毓で、犯人は近くに住む知的障害のある青年だ、と警察は判断する。ところが、李の隣人であり親友であった連正明は、夜中に死んだはずの李らしき人影を李の家に見かけ、李の盲目の祖母も彼女が家に戻ってきたと感じる。連正明は謎の解明に乗り出し、そして、明らかになった事実は次の通りである。殺された女は李ではなく、梅小姫という水商売の女で、阮の浮気相手なのであった。期せずして阮の子どもを妊娠してしまった李は阮に結婚を迫るものの、阮は結核に苦しむ梅とのことがあって煮え切らず、李の妊娠も信じない。李と梅は森の中で、別れてくれとか、中絶すればいい、などと激しく口論する。そこに阮がやってきて、彼が梅と別れ李とともに去ろうとすると、梅は激昂して阮を凶器で刺し殺してしまう。李は梅の顔面を石で殴り、動かなくなった彼女に自分の服をきせて自分にしたてあげ、逃げ去る。一部始終を見ていた知的障害の青年が梅にとどめをさす — 映画はさらに猟奇的な結末へと向かう。森の中の殺人現場で、連はどうとう李と遭遇する。大きな腹をして憔悴した李は、まともな判断能力を失っており、阮が自分の妊娠を信じなかったことを呪いながら、警察に密告したと責めて連を追いかけ、連の腹を石で打つが、そこに殺人の快楽を忘れられなくなったかんの障害のある青年が現れて李を絞め殺してしまう。青年の母親がかけつけて、李の腹を裂いて胎児を取り出し、その子は泣き叫ぶ。

中期以降の作品と異なり心理描写はあまりなく、さしたる必然性もなく次々と人が殺されていく点でやはり「ベトナム三部曲」を初めとする初期の諸作品と同様に迫害性が強く、全体としていえば、緻密に撮られた完成度の高いサスペンスと評価できる。それにしても印象的なのは、李の祖母や障害のある

<sup>15</sup> 許鞍華は晩年とはいえなお生産的で、新作『天水圍の日與夜』（邦題『生きていく日々』）があり、私はまだ観ていないが、香港ではすでに公開されている。さらに『妾の女兒』という映画も公開間近のようだ。

青年の母親などといった老女たちが不気味なものとされていることだけではなく、望まれない妊娠のモチーフがこの最初の作品でグロテスクなほどに明確に提示されていることであり、また両親が殺され胎児だけが助かるという、墮胎とはちょうど反対の結末になっていることだ。愛するものを自ら葬ってしまった現実を補償する、痛ましい創作という側面があるように感じられる。なお、難解で前衛的な手法などと評価されてきたことを「上」で記したが、少なくとも今日の立場から見ると、さほど難解でも前衛的でもなく、最後には謎は解き明かされるので「羅生門的」とは言えない。それでもそのように高く評価されたのは許鞍華にとっては幸運で、彼女は新しい波（「新浪潮」）にタイミングよく乗ることができたわけである。

